

ただの偶然ではない

昭 25 専電・塚越要夫(としを)

① 導入部

この文章の表題は、村上春樹作「騎士団長殺し」の中にアイデア(人間意識の中心概念・いのちの深奥・霊性)として登場する「騎士団長」の独特の話し振りより借用しました。

この「騎士団長殺し」は作者の得意分野である現実世界と異空界との間で展開するファンタジックな小説です。

主人公である「私」は肖像画家であり、アイデアの形象化とされる「騎士団長」と「私」に絡み合う周辺人物像が、メタファー(思念の比喩的表現・隠喩)を現実化した形で詩的に展開されてゆく。ここには、偶然と必然とが交錯しており、想像の世界が現実の世界となってゆきます。(現実世界のメタファー化)また、「私」の人生に起きる多くの事柄は、「私」と関係のないところで、勝手に決められ、勝手に進められているのではないかと問うて、その思考過程のポイントが文中に仄めかされています。



② 面川喜一郎と幸子

面川喜一郎(1919～2009)は、筆者の家内の長兄であり、日立市助川町「日立キリストの教会」の伝道師を永年勤め上げ、当教会が幼稚園併設ということもあり、地元の人々との交流も宜しく、高い人望を身に付けていました。

喜一郎の妻・幸子(1926～2019)も結婚後キリスト教に帰依し、夫妻揃っての信仰生活を続けられていました。

喜一郎高齢のため、その役を辞して千葉県鎌ヶ谷市に居を移してから、地元教会との交流を続け、安静療養に努めていたが、平成20年末に90歳の天寿を全うして昇天しました。(その翌年、平成21年1月に筆者が埼玉県長瀬の宝登山を訪れ、当地の蠟梅園で義兄を偲ぶ俳句を残しています)

その後、義姉・幸子は拙宅に近い船橋市、更に八千代市の有料老人ホームに居を

移し、地元のキリスト教会との交流を持ちながらホームの雰囲気も宜しく、明るい日々を過ごしていたが(家内共々、しばしば慰問に顔を出した)、体調を崩され平成31年1月に肺炎のため昇天しました。

これは、いみじくも義兄昇天の10年後であり、また、同じく蠟梅の香華漂う時期でもありました。そして、その蠟梅の花言葉が「慈愛」なのでした。(この愛に包まれる日常は、クリスチャン生活におけるメタファーとも言えるでしょう)

また、幸子姉の座右にあった「集英社刊・漢字早引き辞書」が遺品として、私の手元に残されましたので、家で何とはなく、中をめくりましたら、どうしたことでしょう。自然に243ページが開きまして、そこに「し」の項、「慈愛」の文字が目飛び込みました。そして、その文字の横に幸子姉の直筆で「幸せ」と書き添えてあるのです。「私に見て貰いたい」との思いのようです。

これら一連のことは、「ただの偶然ではあらぬ」と思われるのです。

③ 命の輝き

私がお世話している無結社俳句会「辻が花句会」の令和元年・六月句会(6月15日)にて当月の兼題「螢」を詠んだ「幽界の散華のごとし螢沢」を出句しまして、好評でありました。これは、以前、大分県由布院旅行の折に遭遇し、感動した実景でありまして、頭に強く残っていたものです。

その4日後、6月19日に六本木の東京ミッドタウン「サントリー美術館」に「遊びの流儀展」観賞を目当てに出かけたのですが、これが調査不足で、26日から開始のイベントでありました。少しがっかりしましたが、同ビル内の富士フィルムサロンにて「輝く光景・宮武健仁写真展」が期間限定で開かれておりました。これを拝見してその迫力と新鮮さにびっくりしました。

この写真展は、四万十川、高千穂峡、吉野川などの螢の群舞をカラーで撮られたものであり、そのパネル展示は素晴らしいものでした。岩手県の森では百万匹と云われる螢の光芒が乱れ飛び、美しい。まさに「幽界の散華のごとし」でありまして、感動致しました。

これも、ただの偶然とはいえないでしょうね。(この東京での展示は明日で終了とのことでしたから、尚更です)

記念にと、著者サイン入りの写真集を購入して参りました。

④ 名倉堂のこと

平成 28 年 5 月に縁があって、千住の旧日光街道を吟行した。JR の南千住駅で下車し、千住大橋を渡ってすぐ国道 4 号線を右に折れて旧街道を歩く。この境界は旧千住宿であり、1689 年、松尾芭蕉が「奥の細道」の旅をスタートした場所でもある。街道沿いに歴史ある建物が残っており、本宿跡など、宿場町の名残りを偲びながら、先に進むと荒川土手の手前、右手に「名倉医院」と大きな看板の掛かっている重厚な長屋門に出くわした。思わず「あ！」と声を上げた。

ここが、1770 年・江戸時代の中ごろ、千住の地で創業した「骨接ぎ」専門・所謂「名倉堂」の総本家であったのです。

さて、筆者が旧制中学一年(1942 年)のことだった。当時の東京市牛込区(現・東京都新宿区)に住んでおり、たまたま、出身校・余丁町小学校(当時、国民学校・初等科)のイベント設営にかり出され、講堂の舞台準備を手伝っていたところ、先輩に頼まれて壁に立てかけられて何枚かの厚い敷き板を一時的に抑えていた。その折り、少し手を緩めてしまったために、その板が倒れかかって来て、あっという間にその下敷きになり、意識を失ってしまった。

このあとは、話で聞いたことですが、近くの東京女子医大病院に担ぎ込まれ、診療を受けましたが、肩甲骨上部複雑骨折との診断、当病院では、手当不能であると云われ、骨接ぎ「名倉堂」を紹介されたのです。当時、「名倉堂」は、神田・駿河台に分院が設立されており、三角巾で手を吊りながら、母に連れられ通い続けました。そして数か月の通院で見事に完治したのです。

それ以来、私の頭の片隅から「名倉堂」の名前が消えることはありませんでした。

その「名倉堂」の本家本元がこの千住だったわけですね。(現在でも多くの接骨院は、名倉の名称を継承している)

この出会いをただの偶然と言ってしまうと、この話は終わりです。然し、これは、77 年ぶりの驚くべきタイムスリップなのです。

そして、更に、話は続きます。

第③章に記述した「辻が花俳句会」メンバーである S 氏は足立区にお住まいですが、「足立区立郷土博物館」で開催中の特別展「大千住・美の系譜展」を觀賞しようとの話があり、平成 30 年 12 月に会社の OB 仲間の T 氏を誘って足を運びました。そして、

再び「名倉堂」の歴史と出会ったのです。

この名倉家の業祖・名倉直賢が千住に「骨継ぎ所」を開業して以来、代々の当主が親の遺徳を継いで、俳諧・狂歌・和歌などの文芸に名を残し、酒井抱一・鈴木其一・谷文晁・大田南畝ら江戸の著名な文人たちとの交流を深められたのです。その他、能楽師・梅若実、歌川国芳、岡倉天心、横山大観、橋本雅邦、菱田春草、河鍋暁斎、森鷗外、更には、尾上梅幸など、錚々たる名も見えます。

千住の名倉家は、こうした文人たちの貴重な資料の保存庫(アイカブ)となっていたのです。今回の「大千住・美の系譜展」は、主に、名倉家よりこれら多くの文芸・美術資料の提供を受けて開催されたのであります。

駿河台・名倉堂分院(現在、名倉クリニック)のロビーには、額装された久保田万太郎の「しらぎくの夕影ふくみそめしかな」の俳句が掛かっています。

「千住の名倉堂本家」「駿河台の分院」そして筆者の今・90歳の歴史、みな、必然的なご縁があつて繋がっているのですね。(神の摂理とでも申しますか?)

何か、敬虔な思いがこみあげて来ました。

⑤ 最後に

「人生万事塞翁が馬」などと言いますが、必ずしもそうではなくて、ここに示しました事例のように「日常生活の中には、目に見えぬ大きな力が背景にある」と感ぜざるを得ないのです。

「美の系譜ここに刻む梅雨晴間」 としを

(完)

若い方に一言

「背後に何か大きな力が存在する。自分の行いがいつも見られている」

と思えば、毎日の行動(生きざま)において、常に自分自身が

責任を負えるものとするべきだ。

こう認識しながら生きて参りましょう。